髙木友之助総長死去

髙木友之助（たかぎ・とものすけ）中央大学総長は、二月十日、心不全のため千葉県市川市の自宅で死去されました。享年七十六歳。ご冥福をお祈りいたします。

（この項、卒業生号と重複しています）

死去に伴う中央大学葬が、三月十九日に青山葬儀所において執り行われました。

なお、政府は三月十日、故髙木友之助氏に従四位勲二等瑞宝章を贈ることを決めました。

絶筆となった原稿（日本経済新聞朝刊スポーツ面掲載）

スポーツピア

髙木　友之助

もう一つの駅伝記録

シドニー五輪も九月に迫った。日本の伝統的なお家芸のマラソンや、その選手の供給の場である駅伝への関心が高まり、ここ数年、日曜日や祝日にテレビのスイッチを入れると、マラソンや駅伝等のロードレースがよく放送されている。

私にとって正月二、三日の箱根駅伝（以下駅伝）が終わらないと、本当の正月が始まらない。毎年、総合優勝校の下馬評が関心の的になり、出場校関係者の愛校心は、いやがうえにも燃えさかる。

私ももちろんその一人だが、私にはもう一つ別の大きな期待がある。

駅伝は本年で七十六回を数えた。中大は七十四回の最多出場数と七十一回の最多連続出場数を維持している。これはあまり知られていない日本一の記録であろう。

毎回出場選手は十人だから連続出場の第六回以降、実に七百十人の選手諸君が、わが校の証（あかし）の赤いタスキを〝しっかり〟とつないで今日に至っていることになる。

現実ではありえないが、もし時間空間を超えて七百十人が勢ぞろいしたら、さぞかし壮観であろう。

七百十人の選手はもちろんのこと、その仲間の部員の不断の努力や、お互い切磋琢磨（せっさたくま）もあったろう。彼らの強固な意志もあったろう。汗も涙も血も流れたろう。そしてまた多くの歴代の指導者・先輩の温かくも厳しい指導もあったに違いない。

しかし、それだけではない。この金字塔の基礎に何かがあると数年来、模索してきたが、それがつかめないまま、いつまでも心に掛かっていた。

かつての中大六連覇のきっかけとなった第三十五回大会で一区の走者、栗原正規が、難所の六郷橋にさしかかった辺りで、かなり疲れ切っていた。その時、西内文夫監督（当時）が、彼に向かって叫んだ。

「二区の二宮を桑にしてやれ！」。その叱咤（しった）激励の言葉に啓発されて頑張り通し、タスキを渡した。

と、今年の駅伝のテレビ中継で語っていた。

私はこの西内監督の言葉にいたく感動した。すべてを自分だけの利害得失や金銭の尺度でしか測ろうとしない昨今、自分本位の利己的な努力や策謀は、やがては時の流れの中に風化して埋没するものだ。

それに引き換え、自分がつらくても仲間を桑にさせたいという、この「思いやり」の心情ほど尊く美しく不滅なものはあるまい。眼から鱗（うろこ）が落ちるとは、まさにこのことである。

校務の暇を盗むように私は時折、陸上のグラウンドに立ち寄る。アスリートの若者たちが自己の可能性ぎりぎりの限界に挑戦し、黙々と精進する姿を眺めていると、若き日のわが青春が思い出されてすがすがしい気持ちになる。

西内監督の〝仲間を桑にしてやれ〟という思いやりの心情が、グラウンド全体に漂っているかに見えて、限りない感慨を覚える。伝統とは、こういうものなのか！　来年が楽しみだ。

（中央大学総長）

巻末表紙に大学葬の写真を特集しました。

髙木総長追悼文

学長　鈴木康司

髙木総長

平成二年以来十年に亙って中央大学総長を務めておられた、髙木友之助文学部名誉教授が、去る二月十日、心不全のため、市川のご自宅でなくなられました。享年七十六歳。

総長という職務は、大学だけでなく、法人である中央大学が設置している附属高校や研究所などを統括する役目ですから、学生諸君と日ごろ直接接触することは少ないのですが、髙木先生がどのような方で、中央大学にとってどんなに大切な存在であったか、ここで少しご紹介して、追悼の言葉にしたいと思います。

髙木先生は大正十二年（一九二三年）東京でお生まれになりました。父上は大相撲の名門立浪部屋の親方で、不世出の大横綱と呼ばれた双葉山や、同じく横綱羽黒山、大関名寄岩などを育てられた元小結緑島の立浪親方であります。幼いときから下町情緒あふれる両国界隈で成長された先生は、府立三中（現在の両国高校）から旧制の一高、そして東大へと進まれました。一高時代のお仲間で生涯の友となられた方に三重野康元日銀総裁がおられます。先生は大学で中国古代哲学を学ばれ、昭和二十五年（一九五〇年）に中央大学商学部助手となられたのを皮切りに、昭和二十九年（一九五四年）には創設されてまだ三年目の文学部哲学科の専任講師となられ、以後のご生涯を一貫して中央大学のために尽くされました。昭和三十三年助教授、三十九年教授となられた先生は、昭和四十八年文学部長、六十年大学院文学研究科委員長を務められた後、平成二年（一九九〇年）から同五年まで中央大学学長、また学長就任と同時に総長職も兼任され、平成六年四月以降名誉教授ご就任以後も総長を務めておられました。

髙木先生のご研究分野は先秦から漢代の思想に亙り、特に楊雄の思想、著書についての論及や『『塩鉄論』に現れた桑弘羊の経済思想について』などのご論文は学会から高い評価を得ておられます。先生のご指導、ご薫陶を受けた後輩、哲学科の教え子は数多く、その誰もが先生を慕っておられますが、それは、一度会った人間なら直ぐに分かるほどの偉大な先生の人間性によるものでしょう。誰が相手であろうと暖かく包み込むようなお人柄、剣道や茶道の深い素養から来るすっきり伸びた背筋に、颯爽たる華のある姿、外柔内剛の精神、人情を尊ばれ、日本酒をこよなく愛して友人、後輩、学生の別なく杯を酌み交わす君子の風格とは、髙木先生その人だったのです。

髙木先生は、また、中央大学のスポーツ振興にも大きな足跡を残されました。永年、剣道部部長として後進の育成に努力されただけでなく、相撲部については部長職こそ務められませんでしたが、名誉顧問として出島、玉春日といった素晴らしい力士の誕生に寄与され、更に日本学生相撲連盟会長として学生相撲界全体に大きな貢献をなさいました。更に、学生時代に陸上競技をされていたことから、箱根駅伝には殊のほか関心を持たれ、毎年正月二日、三日には必ず読売新聞本社前まで出向かれて中大の選手諸君を激励されておられました。

先生の活動は学内にとどまりませんでした。総長の重要な任務の一つに全国に存在する中央大学ＯＢの会、即ち学員会でありますが、この各支部を回って中大関係者の結束を固める役目があります。髙木先生は文字通り津津浦浦をめぐられて学員のかたがたの信望を集められ、その上韓国、台湾の支部をも歴訪されて中央大学のアイデンティティー確立に大きな役割を果たされたのです。

その一方、お好きな茶の湯や書道では、他者の追随を許さぬ高いレベルに達しておられました。例えば、髙木先生を心の師と仰ぐ卒業生のなかに、表千家の家元千宗佐氏がおられること、先生の書は学員の誰もが入手したいと望み、先生にお願いしていることを知れば直ぐ肯けるでしょう。

一言でいうと、髙木先生は中央大学の誇りであり、我々後輩教職員にとっては偉大な兄のような存在だったのです。

先生は常々、二十一世紀には中央大学を日本一の私立大学にしたいとおっしゃっておられました。我々後輩としては、先生のこの夢を一歩一歩実現に近づけるべく努力する他ないと思っています。

髙木先生のご冥福を祈りつつ。